

モンテーニュにおける「他者」の把握と「他者描写」の実例

—— キケロの場合 ——

徳 永 雅

モンテーニュがモラリストの祖と見做される所以は、自分自身を考察対象とし、自己を描くことによって人間全般の本性を描いたことにある。ピエール・ヴィレーはこれを「自己描写」« la peinture du Moi » と命名した上で、ここにこそモンテーニュの個性が見出されるとし、未だ「自己描写」が確立されていない『エッセー』執筆初期及び「自己描写」が減少した晩年の加筆部分は没個性的であるという見解を示している¹⁾。しかし我々は前稿において、『エッセー』の主要なテーマの一つを構成しているモンテーニュの« vertu » 観が、「自己描写」によってではなく「他者」について考察し描くという行為を通して変遷したことを明らかにし、この行為の重要性を裏付けた上で、これをヴィレーの「自己描写」に倣って「他者描写」« la peinture d'autrui » と名付けた²⁾。本稿ではまず、モンテーニュが「他者」をいかに把握しようとしていたかを明らかにし、次に『エッセー』において「他者」が実際にどのように描かれているかを、キケロを例にとって考察してみたい。

I. 「他者」の把握について

『エッセー』には数多くの人物が登場し、その数は一千人を下らない。また、その多くはモンテーニュが読書をする中で出会った人物である。彼の読書に対する考え方は、1578年頃に執筆したとされる第2巻第10章「書物について」に顕著に見出すことが出来る³⁾。

^(A) J'ayme aussi Lucain, et le pratique volontiers : non tant pour son stile que pour sa valeur propre et verité de ses opinions et jugemens. Quant au bon

1) Pierre Villey, *Les Sources et l'Evolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, 2 vol. 参照。

2) 拙稿 « L'évolution de l'idée de "vertu" chez Montaigne — La signification de la "peinture d'autrui" — », in *Etudes de Langue et Littérature françaises*, N° 64, pp.3-15 参照。

3) Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, PUF, 1965, p.407 注釈参照。

Terence, la mignardise et les graces du langage Latin, je le trouve admirable à représenter au vif les mouvemens de l'ame et la *condition* de nos meurs ; [...] (II, X, pp.410-411⁴⁾)

(A) Je voy aussi volontiers les Epitres « ad Atticum », non seulement parce qu'elles contiennent une tresample instruction de l'Histoire et affaires de son temps, mais beaucoup plus pour y descouvrir ses *humeurs* privées. Car j'ay une singuliere curiosité, [...] de connoistre l'ame et les naifs jugemens de mes auteurs. (*ibid.*, pp.414-415)

(A) ... Cæsar singulierement me semble meriter qu'on l'estudie, non pour la science de l'Histoire seulement, mais pour luy mesme. [...] (*ibid.*, p.416)

これらの例は、モンテーニュが読書に何を求めているかを述べたものであるが、興味深いことに、彼が求めているのは本に記された知識としての事実よりはむしろ、そこに描かれた人物の心の動きや我々の行いの「*condition*」、さらにはそれらの人物を描いた著者自身の個人的な「*humeur*」など人間そのものであるということが、「*non seulement ~ mais beaucoup plus...*」などの後者を強調する言い回しによって述べられている。彼自身、「私は自分が読む本の著者達の心とありのままの判断を知りたいという奇妙な好奇心を持っている」と言っているように、このような観点による本の読み方は特筆すべきものであろう⁵⁾。

またモンテーニュは優れた歴史家を、「知る値打ちのある事柄を選択し、二つの報告のうちからより真実らしい方を選び分けることが出来る人、また君主の「*condition*」や「*humeurs*」から彼らの意図を引き出し、彼らにふさわしい言葉を語らせる人」(*ibid.*, p.417)と定義している。

4) *Ibid.*, 『エッセー』からの引用は全てこの版を用い、引用箇所は本文中括弧内に示す。尚、最初のローマ数字は巻を、二番目は章を表し、引用文頭の記号(A)は1572~80年の執筆部分を、以下(B)は1580~88年の執筆部分を、(C)は1588~92年の加筆部分を表す。

また、日本語で引用したものは全て、既訳を参照した上での拙訳であり、引用文中のゴシック体及びイタリック体は全て筆者によるものである。

5) モンテーニュの「他者」への興味は、読書においてのみ見出されるものではない。彼の旅行好きは有名であるが、彼は外国を訪問する目的を、(A)「我がフランス貴族のように、サンタ・ロトングの長さが何歩あるかや、リヴィア嬢の下着の豪華さを明らかにするためだけでなく、主としてそれらの国の人々の気質「*humeurs*」やあり方「*façon*」を明らかにし、我々の脳味噌を他人の脳味噌にこすりつけ、磨くため」(I, XXVI, p.153)と述べている。ここでも「*non seulement ~ mais principalement...*」という後者を強調する言い回しが用いられ、また「*humeur*」という語と、「*condition*」の類義語である「*façon*」という語が対で用いられている。従って、モンテーニュにとっては旅行も読書と同様、「他者」の「*humeur*」と「*condition*」を知る上で有効な手段であったと言えよう。

ここで我々は、先の引用にもこの引用にも繰り返し用いられている「condition」と「humeur」という語が、『エッセー』というこの書物の序文、「Au lecteur」の中で対の形で用いられている語であることを想起すべきであろう。

(A) C'est icy un livre de bonne foy, lecteur. [...] Je l'ay voué à la commodité particuliere de mes parens et amis : à ce que m'ayant perdu (ce qu'ils ont à faire bien tost) ils y puissent retrouver aucuns traits de mes conditions et humeurs, et que par ce moyen ils nourrissent plus entiere et plus vifve, la connoissance qu'ils ont eu de moy. [...] Je veus qu'on m'y voie en ma façon simple, naturelle et ordinaire, sans contention et artifice : car c'est moy que je peins. [...] (Au lecteur, p.3)

モンテーニュはこの序文において、『エッセー』の題材が自分自身であるということと言明し、自分の親族や友人がこの本に自分の「conditions」と「humeurs」のなんらかの特徴を見出してくれるように、と説明している。換言すれば、モンテーニュは意識して著書に自らの「conditions」と「humeurs」を描いたのであり、「conditions」と「humeurs」という概念そのものが「自己描写」の本質であると言えよう。これらの概念をどのように捉え、どのような訳語を与えるべきかは難しい問題であるが、本稿では一貫して、「condition」については、「生き方、性質、習慣、意見」などを含めて、生まれ、環境、身分、或いは人間存在であることそのものによって決定づけられるという意味での「ありよう」、*«humeur»*については「ユモリズム」を念頭に置いた上での「気質」という訳語を与えることとする⁶⁾。

Villey-Saulnier 版の『エッセー』はこの序文について、「モンテーニュがこの時期にエッセーについて抱いていた構想は、自己描写を全く意図していなかった初期エ

6) Villey, Gr. Norton 編纂の「Lexique de la Langue des Essais」 dans *Les Essais de Michel de Montaigne*, Bordeaux, F. Pech, 1933は「condition」の語義を6つの項目に分類し、序文の「condition」を第3の定義：「manière de vivre, d'être : qualités bonnes ou mauvaises ; mœurs ; opinions」の例文として引いている。また「humeur」については、「1. Substance fluide. 2. Substance fluide du corps (vicié ou non). 3. Goût ; caractère ; goûts, sentiments ; opinions. 4. jugement ; pensée. 5. fantaisie ; manie ; caprice.」の5つの項目に分類し、序文の「humeur」を第3の定義に当てている。現代では、「humeur」という語は「液体」という意味では全く、また「体液」という意味でもほとんど用いられないが、その語源であるラテン語の「humor」という語は主として「液体」「体液」という意味であり、18世紀末頃まで一般的な考え方として定着していた古代ギリシアの「ユモリスト」の説、即ち人間の気質は「4体液」の比率によって「多血質」「粘液質」「胆汁質」「憂鬱質」の4つに分類されるという説によって次第に「気質」「性質」という意味に転化していったと考えられる。実際『エッセー』にもこの説に関する記述があり(I, XXXVIII, p.234)、モンテーニュの「humeur」という語を解釈する場合には「ユモリズム」を念頭に置く必要があるであろう。

セー（1572年頃）の構想には適応しない⁷⁾との注釈を与えている。この見解は、ヴィレーの主張、すなわちモンテーニュは当時流行していた「ルソン」« leçons »（古代の哲学者などの説を寄せ集めて注釈を施したもの）を目して『エッセー』を書き始めたのであり、当初「自己描写」の意図は全く無かったために、初期エッセーは没个性的であるという主張によるものであり、これが一応の定説となっている。ヴィレーはまた、「自己描写」が減り、書物からの引用や借用が増大するところの晩年、1588年以降の加筆部分についても、再び流行への追従に逆戻りした、何ら個性的でないものであると断言している。

しかし、本論冒頭に見たように、モンテーニュは読書において« condition »と« humeur »の観点から「他者」を捉えようとしたのであり、それは彼が『エッセー』という著書に主題として記そうとしている自己の« condition »と« humeur »と、正に同じ概念なのである。すなわち『エッセー』の目的である「自己描写」とモンテーニュの「他者」の把握は« condition »と« humeur »という概念において密接に結びついているのであり、『エッセー』において「自己描写」と「他者」の問題は、相互に決して切り離すことの出来ない関係にあると言えよう。

Ⅱ. 「他者描写」の実例

「書物について」の章が執筆された少なくとも1578年の時点では、モンテーニュは読書をする際に「他者」を« condition »と« humeur »の観点から捉えることを重視していたが、それでは、モンテーニュ自身が『エッセー』の中に「他者」について記述する際にも、「他者」の« condition »や« humeur »を描いているのであろうか。また、それが描かれているとすれば、同じく1578年以降なのであろうか、或いはそれ以前からなのであろうか。これらの点を解明するために、『エッセー』に数多く登場するキケロを例にとって考察してゆく。モンテーニュは1578年頃、「彼の個人的な気質が見出せる」という理由のもとにキケロの著書を読むと言っていたが、モンテーニュ自身がキケロについて述べる場合においても、キケロの「気質」に関する記述は為されているのであろうか。『エッセー』に「キケロ」という名が現れるのは、70カ所においてであり⁸⁾、その中にはキケロの引用のみに終始しているものも少なくないが、数カ所においてモンテーニュはキケロに対し、個人的な見解を述べている。それらの内のいくつかを、執筆順に見てゆこう。

『エッセー』に初めてキケロに関する実質的な記述が登場するのは、1572年頃に

7) *Essais*, p.3 注釈参照。訳は筆者による。

8) Cf. Roy. E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne*, Droz, 1981, t.I, p.228 『エッセー』に記されている全ての人名の中でキケロは、プラトン、カエサル、ソクラテス、プルタルコス、アリステレス、アレクサンドロスに次いで7番目に多いものである。

執筆されたと推定されている第1巻第39章「孤独について」である⁹⁾。小プリニウスの言葉を論じていたモンテーニュは、それがキケロと同じ「気質」から生じたものであると気付く。

(A) 小プリニウスは名声のことを言わんとしているのだ。それは「私は孤独と公職からの閑暇を著作に向けて、永遠の生命を得ることに用いたい」と言ったキケロの**気質**と同じ**気質**から生じるものである。(I, XXXIX, p.244)

モンテーニュは、キケロの言葉から引き出した彼の「*humeur*」によって、ある種の「*humeur*」のタイプを想定し、小プリニウスの言葉から引き出した「*humeur*」をそのタイプの中に位置づけているのである。以下キケロと小プリニウスは同じ範疇の「気質」に属するものとして語られてゆく：「(A) ところで小プリニウスとキケロが我々に示す栄誉という目的であるが、それは私の考えとは大いにかげ離れている。隠遁と最も反対の**気質**は野心である。栄誉と安息は同じ住みかに住むことは出来ない。」(ibid., pp.246-247) 「隠遁」と「安息」を愛するモンテーニュにとって、「栄誉」を目的とする小プリニウスとキケロの考えは、確かにかけ離れたものであったに違いない。

続く第40章「キケロに関する考察」においても、この二人の「気質」に関する記述が継続してゆく。

(A) Il se tire des escrits de Cicero et de ce Plin (peu retirant, à mon advis, aux *humeurs* de son oncle), infinis tesmoignages de *nature* outre mesure ambitieuse : entre autres qu'ils sollicitent, au sceu de tout le monde, les historiens de leur temps de ne les oublier en leurs registres ; [...] (I, XL, p.249)

ここではまず小プリニウスと大プリニウスの「*humeur*」の比較が為され、さらにモンテーニュが「野心的な性質を示す証拠」であると判断するところのキケロと小プリニウスの行動が語られる。ここでは「*humeur*」の類義語である「*nature*」という語が用いられており、モンテーニュが「他者」を描くに当たって、実際に「性質」「気質」に言及していることは明白である。

以上で明らかかなように、「自己描写」が始まる数年も前に、キケロについて記述する際に「*humeur*」という概念が用いられているのであり、モンテーニュが自覚していたにせよ、していなかったにせよ、初期エッセーにおいて、既に「自己描写」

9) *Essais*, p.237 注釈参照。

へとつながる人間探究の基本的姿勢が確立しつつあると言える。この姿勢は、知識欲に立脚した「leçons」の作家達と決定的に異なるものであり、「他者描写」しか見出されない初期エッセーも、決してヴィレーの言うように「没個性的」ではないと言えよう。

次に、1578年以降におけるキケロについての記述を見よう。モンテーニュは「書物について」の章において「キケロをよく読む」と言った少し後で、次の様に述べている。

(^(A)) キケロについては、彼が学問以外には、心の内に特に優れたものを持っていたわけではないという一般の判断と私も同様である。彼は、彼の様に太っていて愉快な人が普通そうであるように、善良で良い性格の市民であった。しかし本当のところは、懶惰と野心的な虚栄を多分に持っていた。

(II, X, p.415)

1572年頃、モンテーニュが繰り返し指摘していたキケロの「野心的」であるという「humeur」が、ここではさらにはっきりと欠点として述べられている。彼はキケロの「気質」、さらには人間性を辛辣に批評しているのである。

第2巻第16章「栄光について」においては、「榮譽」に対する様々な人の意見を列挙していた最後にキケロを登場させる：「(^(A)) もしも、キケロがこの主題について書いた本があれば、彼はご立派なことを我々に語ってくれるだろうにと私は思う。というのも、この人は榮譽欲に現を抜かしていたので、本気でやったとしたら、『徳は、いつもそれに続いてある名譽のためにのみ望ましい』という他の人々も陥った極みへ、自ら落ちただろうと思うからだ。」(II, XVI, p.620) モンテーニュはここで「榮譽」に関してキケロが言うであろう意見を想像し、言わば捏造している。これは彼の思考にキケロの「気質」が観念としてしっかり定着していることの証拠であろう。また、彼はここでもキケロの人間性に対して痛烈な批判を行っている。

以上の二つの例は、「自己描写」の盛んであった、ヴィレーの言うところの「個性的」な時期に書かれたものであった。それでは、彼が再び「没個性的」と称する晩年、1588年以降における記述はいかなるものなのであろうか。有名な第2巻第12章「レーモン・スボンの弁護」における加筆部分を見てみよう。1580年以前には「精神の位置」についての様々な意見を列挙しただけであった箇所、晩年次の様な加筆が行われている。

(1) キケロは「精神の形とそれがあつ場所については、知ろうとすることさえしてはならない」と言つた。この人自身の言葉についてはこの人に任せておこう。彼の雄弁な言い方を変えてどうなるだろうか。それに彼の作り出した物から材料をかすめ取つても、ほとんど利益は無い。それらは頻繁に現れるものではなく、堅固でもなく独創的でもない。(II, XII, p.543)

仮にモンテーニュがキケロの言葉を知識としてのみ示すことを望んでいたのであれば、この記述は「... dict Cicero」で終わつていたであらう。しかし彼はさらにキケロという人間の「ありよう」について自分の判断を下し、批判的な意見を述べている。この例を見ただけでも、晩年の「他者描写」において尚モンテーニュが人間の「ありよう」を一貫して探究し続けていることは明白である。

以上、キケロについての記述を、執筆順に考察したわけであるが、執筆初期から晩年に至るまで、モンテーニュは常にキケロの「condition」と「humeur」に着目し、それらを独自の視点で描き続けている。しかも、彼はキケロの人間性に対して常に否定的であるにも関わらず、キケロの著書からの引用及びキケロについての記述は全エッセーを通して、最も多いものの一つなのである。これは何故なのであつらうか。その理由は、第一にはモンテーニュも認めているように、彼の学問の面が優れているからであらう。だがそれ以上に、モンテーニュ自身と全く「気質」を異にする人間として、キケロに興味があつたという理由が考えられるのではないであらうか。『エッセー』には、「(1) 私はできるかぎり、他人を私のありようや主義から解放し、ただ彼自身において、他と関係なく、彼自身のタイプに基づいて彼を形作りながら、考察する。〔中略〕従つて、私と異なれば異なるほど彼らを愛し、尊敬する。」(I, XXXVII, p.229) という記述がある。モンテーニュがキケロを「愛し、尊敬」していたかどうかはさておき、自分と全く異なる「気質」の人間として、恰好の考察対象であつたのだらう。そして、自己と異なる「他者」の「condition」と「humeur」を描くことは、決して「自己描写」とは無関係ではなく、モンテーニュは「自己描写」に先立ち、「他者描写」において人間の「condition」と「humeur」を描くことによって独自の「自己描写」の方法を築いていったのである。

モンテーニュは読書をする際に「他者」の「condition」と「humeur」に着目し、自身、著書の中に「他者」の「condition」と「humeur」を描いた。そしてそれは、彼が『エッセー』執筆の目的であると言明しているところの、「自己描写」において描こうとした基本的且つ本質的概念を成すものであつた。さらにモンテーニュは、プルタルコスやセネカの著作を読むことによって、「^(A) j'apprens à

renger mes *humeurs* et mes *conditions* » (II, X, p.413) という興味深い記述を行っている。モンテーニュは読書において「他者」の「*condition*」と「*humeur*」を見出し、それらを記述しながら自らの「*condition*」と「*humeur*」を「規整」したのであり、「他者描写」はモンテーニュ自身の人間形成においても、「自己描写」に決して劣らぬ役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

(大阪大学博士課程在学)